

良くなり、体力も逐次回復してきました。私は三月、虫垂炎で入院、手術を受けました。

内地帰還は、早い人は昭和二十年十二月の人もいました。私は米国の艦に乗り、昭和二十一年四月、神奈川県に上陸、旧野比海軍病院に入り復員することができました。

孤島の従軍記

山口県 野村 勲

昭和十八年三月、私の結婚記念日です。重苦しい戦時下のこと親父とおふくろは、どうせ近いうち兵隊に行く息子だから今のうちに嫁をもらって家の跡継ぎを急げ、とばかりに母親の遠縁に当たる娘に目をつけて結婚式をあげさせたいんです。

満二十歳の花婿と十九歳の花嫁は、当時の盛装といっても国民服とモンペ姿でした。隣に並んだ嫁さんを見て、なかなかいい娘だなあと思ったのが実感でしたが、

甘い新婚生活も夢のうち、翌昭和十九年一月の正月気分もまださめやらぬある日、和木村役場の兵事係が「二月一日、呉海兵団ニ入団スベシ」との海軍の召集令状を持ってきた。そのころ、上映されていた映画「荒神山の吉良の仁吉」の主題歌に「嫁と呼ばれて未だ三月」とあったが、あの心境でした。全く戦争とは無情なものと痛感しました。

多勢の村人や小学生の歓呼の聲に送られ、村境の大和橋で召集された三人を代表して挨拶をしたことを思い出します。なんと言ったか忘れてが強そうなりつばなことを言ったようです。

大竹駅から汽車に乗り、どよめく万歳の声、そのときホームの柱のかげで黙って私の方を見つめていた新妻の淋しげな顔が忘れられなかった。

昭和十九年二月一日、送ってくれた伯父と別れて宮門を潜れば、ここは別世界。受付をすませて身体検査、身長、体重測定、内科検診、「まごまごするな」と怒鳴られながら軍医の前に立った。聴診器を当てた軍医は「右肺尖部呼吸延長」、何のことかわからんが、大

した事もなかったのだろう、「合格」といわれホッと
した。ふと宮門の方を見ると、ぞろぞろと風呂敷包み
を抱えて出て行くものがある、不合格になって即日帰
郷の組だということだった。

後になって思ったことだが、あのとき不合格になっ
ていたらこんな苦勞はせぬものを、とハンモックに潜っ
て涙したのも苦しい思い出です。

海軍生活について

「スマートで目先がきいて几帳面、負けじ魂これぞ
船のり」とは海軍伝統の言葉ですが、どれを取ってみ
ても私に当てはまらないことばかりで、スマートとは縁
遠く、ひよろひよろで青白く、動作はボヤボヤ、マゴ
マゴしてルーズで諦めが早く、いつも甲板整列には自
慢じゃないが一番先に直心棒を食ったもんです。あの
痛さは今も忘れられません。

訓練は厳しかった。釣床訓練、手旗、カッター、駆
け足、陸戦、銃剣術、寒い冬の最中でも汗をかかない
科目はなかった。

やがて四月になり、海軍式シゴキのバッタ、ピンタ、

前に支え、毎日鍛えられて、ピンタの一発や二発を食
らうのは屁のカッパになったころ、分隊長に呼ばれて
「横須賀の海軍通信学校へ入学するように」と言われ
た。どうして私が選ばれたのか今もって分からない。

海軍通信学校

桜花らんまんの昭和十九年四月、横須賀通信学校
「横通」に入校、電波探知機を取り扱う電測術講習生
となりました。海軍最新兵器だと仲間は喜んだけれど
今考えるとアメリカのリーダーに比べるとチャチなも
のだった。やたらと真空管ばかりならんでいて、それ
に「Tの三一」など符号をつけて呼んでいた。入隊
前に多少知識はつけていたので学科は難しくなかった
が、相変わらず古年兵にはシゴかれた。抵抗できない
下の者を一方的に殴りつけて、これが日本海軍の大和
魂だと、こんな馬鹿な野蛮なことがあるもんかと憤慨
したことも何度かありました。

出撃

「横通」をやっと卒業し、そこで行き先が決まった。
「二十六特根」とのことだが一体どこにあるのか、だ

れも知らない、古い下士官たちが「お前たちは玉碎部隊行きだ」と冷やかした。呉海兵団に仮入団して、南方行ききの船を待つ。

昭和十九年七月某日、待望の駆逐艦「霜月」に乗り込む。海は広いな大きいな、そんなのんきなことを言う間もなく当直勤務につかされる。電探でなく信号台にのぼつての見張りです。艦は全速力で走るので物凄く揺れた。船酔いする奴もいて怒鳴られて帽子や靴下の中にゲロをする者もいる。「右舷前方三〇度 魚雷」と報告したのは良かったが、あとから「ただ今は飛魚の誤りでした!」とやってとんできた当直士官にこっぴどくぶん殴られた奴もいました。

ともかく見張りは艦の運命を左右する大切な役目と胆に銘じて目を光らせるが、艦が揺れるので望遠鏡にしがみついているのがやっとの情けない水兵でした。台湾沖から南支那海も敵潜の襲撃もなく、いろいろの失敗を重ねて殴られながら比島マニラに上陸したのです。

現地の海軍部隊に仮入隊して十日あまりして「二十

六特根」がハルマヘラ島だと知った。頼りない水兵十名は漁船を改造した船で島から島へ夜間だけの航海を赤道直下の目的地まで続けました。やることがないので甲板に寝転んで故郷の話に花が咲いた。星のきれいな夜でした。

「波のしぶきで眠れぬ夜は……艦隊勤務の歌を鼻歌まじりに歌い、見上げる空に南十字星が光っていました。この時が兵隊になって初めての極楽気分だった。これから行く地獄の島が待っているとも知らないで。

ハルマヘラ島

地図を開いてよく見るとニューギニアの西でセレベス島との間、赤道の直下で小さい島だ。「よく見ろ、頭の上に赤い線があるだろう」と冗談を言われて、ほんとに上を向いたが何もなかった。苦労を重ねてハルマヘラに辿り着いたのは昭和十九年九月末でした。一カ月近くかかっていました。

敗戦近いころのこの島では、食糧が底をついて芋ばかりでサゴ椰子の粉の団子汁がうまかった覚えがあります。現地の陸戦隊に辿り着いたその日「貴様たちは

何しに来たか」と問われて驚いた。だれかが小声でビクビク「電探兵であります」と答えた。隊長は「なにっ電探だと、そんなものはぶっこわれてない」物凄いいんまぐで怒鳴られた。我々には最初から銃は渡されていない。陸戦隊に行く者に銃を持たせない。上官も無責任なものだ。丸腰で来た我々に空気銃みたいな短い変な銃が渡された。弾帯は肩から斜めにぶらさげる実情に情けない不格好な姿でした。

早速、見張り勤務に就くことになった。通信学校出の電探員だろうが構うもんか見張りに使えということだろう。本部裏の小高い丘の上に一本の大木があった。その上に櫓を組んで見張り台となっていた。高さ十五メートルありました。他の班の兵長と一緒に登った。なるほど四方がよく見渡せるが敵機からは狙い撃ちされるなあと話していた矢先に爆音が聞こえてきた。「爆音っ、方向は南、向かって来る」と下に向かって大声で叫んだ。その瞬間バババツと機銃掃射だ。二人は大きな枝に抱き付いた。敵機は方向転回してまた来る。二人は枝に抱き付いてくるくる回る。早く地上に

下りたいが命令がないからどうにもならん。やっと「見張り員、退避せよ」と号令がかかった。急いで下りて近くの防空壕に飛び込んだら、「お前たち、望遠鏡に覆いをかけてきたか」と班長の声、兵長が飛んで出ていった。

敵機は去ったが、彼は戻って来ない。心配になって見にいいたら大木の下で朱けにそまつて息絶えていた。私は声を出して泣いた。あのとき、自分が出ていたらと思ひ運命は紙一重としみじみ感じた。

「オビ」島見張所

それから数日して近くのオビ島の見張り所へ派遣となった。この島では哀れな事件に遭遇した。その兵は広島県の出身で、連日の空爆の恐怖と勤務の過酷さでついに発狂し、上官を傷つけ島内のジャングルに脱走し、行方不明となった。

私も搜索隊に加わってこの逃亡兵の搜索を命ぜられジャングル奥深く探し回った。三日目に山中の洞窟で彼を発見、逮捕して連行したが、彼はおとなしく連行され島を離れて連れ去られた。その後、彼は銃を奪い

再び逃走しながら、追跡者に対し発砲抵抗をしたので、ついに射殺された事件があった。

軍隊内における上官と兵士の絶対的な従属関係、孤島における極度に窮迫した生活環境、ましてや連日の空爆の重圧によるすべての希望との断絶、彼の射殺に對し、私どもは何とも言えない哀れさを感じました。

この小さな島は毎日の空爆に曝され住む余地がないほど荒され、島を離れることに決まりました。

リボベ岬の原始生活

島の向こうのリボベ岬への移動は夜間カヌーを漕いで渡りました。住まいは付近の樹木を倒し、木の葉で屋根を葺いて雨露をしのぐ簡単な住居で足りります。何としても食物を探さねば、一切の補給を断られたこの孤島では一日も生きて行くことはできません。

おおくほしのぞこ

大國主命のように大きな袋を肩に担いでジャングルに踏み入れる。パイヤは根から倒し果実と根も採る。根は塩漬けにして食べると牛蒡の味に似ていた。動物は蛇、大トカゲ、何でも蛋白源として捕りました。大トカゲは大きな幹の周りをグルグル回って逃げ回りま

したが、銃弾が命中すると五十メートルも跳んで倒れました。体重は三十キロもありました。

海へカヌーで漕ぎ出すと、全然漁を受けたことのない魚たちは逃げなくてむしろ集まって来る。鯉のような魚を三、四メートルの長い竿で叩いて捕りました。この岬に居る間は結構自給生活が順調に繰り返される日々でした。

次いで命令でバチャン島に移動しました。この島には電探が何とか作動して残っていました。この島は人員が前のリボベ岬の栽培居住をしていたので食料自給が困難となりました。海岸に出て潮の引くときに「あさり」を拾って露命をつなぐ足しにしましたが、「あさり」拾いが命がけでした。

海岸は遮蔽物がないので、敵機に発見されて掃射の目標となります。三十メートル先はジャングルが繁っていて、そこへ飛び込めば敵機の掃射から脱することができますが、その三十メートルが危なくて走れないのです。伏せて死んだ真似して動かずに、敵機の去るのを待つ以外に方法がありません。この五分間ほどの

我慢の一時の長かったこと。

敵機の掃射も怖い、飢餓もつらい、孤島に置き去りにされた哀れな兵士の日々であった。

終戦、自活

昭和二十年十二月のある日、日本兵らしき者が現れて、「日本兵はおらんか」と呼びかける。皆で相談の結果一人を選抜して兵に恐る恐る近接し面談の結果、彼は終戦を伝える搜索隊の兵であった。東北訛りの兵であったらしい。

島の海軍部隊の本部があったハルマヘラ島カウに集結したが、各地から各島から続々と集まって来る兵士で「カウ」は急激に人員が増え、食糧難へと陥る。対策としてジャングルを切り拓いて開墾が始まる。

五十人くらいが一列横隊に並んで、各自ドラム缶で作ったスコップで掘り返しながら後退する。元氣な者と、マラリアや栄養失調で弱った者と、大きな差が出てきた。隣で働いていた兵が、予告なしに朽ち木が倒れるように突然バタッと倒れる、驚いて抱くと小さな呻くような声で「オカアサーン」と一言で息を引き取っ

た。毎日のように一人二人と死者が出る。

開墾地は十三町歩に及んだ。どこから入手したか芋蔓が植えられ、四カ月後には甘蔗で自活する。明るい見通しがついたのであったがつらい毎日の作業であった。

海軍陸戦隊では生還者一五〇名、死亡者一〇名であった。

昭和二十一年六月五日、夢のような生還の日を迎えました。

釜山牧之島沖海空戦

身代わり「三曳」乗船

全英靈に捧ぐ

長崎県 酒井敏郎

私は昭和二年生まれですから戦争参加者では一番若いと思います。現在の中学三年の時に海軍に入ったのですから。昭和十七年三月に高等科を卒業した時は海